

資料・研究ノート

クランタンの農村におけるポンド(寄宿宗教塾)

——その変容と現状——

坪 内 良 博*

A pondok School in Kelantan, Malaysia

by

Yoshihiro TSUBOUCHI

は じ め に

本稿は1970年10月から1971年9月に至る1年間、西マレーシア東海岸クランタン州において筆者が行なった農村調査の第6報である。¹⁾ 主な調査地はクランタン川の河岸段丘上の天水田、ゴム園の混在地域に位置する146世帯からなるマレー人の集落であったが、この集落に関しては既に五つの調査報告を發表している所以他们を参照されたい。²⁾ 本稿ではこの調査地に隣接する一つの寄宿宗教塾(pondok)をとりあげ、学校教育を中心とする近代化の波にさらされた田舎の弱小寄宿宗教塾の変容と現状を記録することを試みる。

I クランタンのポンド——その機能の分極化——

ポンド(pondok)というのは小屋の意であるが、³⁾ イスラムの宗教教師(guru)の住む家およ

*京都大学東南アジア研究センター

- 1) この調査は京都大学東南アジア研究センターとマラヤ大学経済経営学部によるマレーシア農村調査計画の一部として行なわれた。この調査計画はマレーシアの稲作農村の比較を目的として、社会科学系と自然科学系の研究者の協力によって行なわれた総合的なもので、調査地としてケダー州、クランタン州、マラッカ州の農村が選ばれた。総合的な報告がいずれ發表される予定である。本稿の作成に関して、竜谷大学教授口羽益生、京都大学東南アジア研究センター教授石井米雄、同助手前田成文の各氏からいろいろと貴重な助言をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。
- 2) クランタン州に関する筆者の既発表の報告としては次のものがある。
「クランタンの一農村におけるタバコ耕作の導入と社会・経済的变化」『東南アジア研究』9巻4号、1972. 3; 「東海岸マレー農民における土地と居住」『東南アジア研究』10巻1号、1972. 6; 「マレーシア東海岸の天水田地域における稲作——カンボン・ガロにおけるケース・スタディ——」『東南アジア研究』10巻2号、1972. 9; 「東海岸マレー農民における結婚と離婚」『東南アジア研究』10巻3号、1972. 12; 「マレーシア東海岸の村落住民の収入と収入源——カンボン・ガロにおけるケース・スタディ——」『東南アジア研究』10巻4号、1973. 3.
- 3) アラビア語の funduq (place of temporary residence) が語源であるともいう。

び教場 (*madrasah*) を中心として建てられた小さな小屋に生徒が1人または2, 3人ずつ居住して自炊生活を行ないながら師の教えをきく一種の寄宿宗教塾もこの名でよばれている。この種の寄宿宗教塾はジャワやアチェにもみられるが,⁴⁾ マレー半島では主として北部の諸州に分布しており、また国境を越えて南タイのイスラム教徒の間にも存在する。⁵⁾

ポンドの宗教教師は他のポンドで学んだり、メッカに長期間滞在したりしてイスラムの知識を身につけた者である。これらの者が、自分自身の土地、父母の土地、あるいは村人その他から宗教目的のために寄付された土地 (*wakaf*) にポンドを開く。ポンドの名声を支えるのは個人としての宗教教師（以下グルと書く）の評判である。この意味において、ポンドは一代限りの性格をもっているが、若干のポンドでは、グルの息子や娘の配偶者などがこれを継承することがある。

グルはイスラムの知識においてすぐれているばかりでなく、この地域のイスラムの特徴であるスーフイズム（神秘主義）に関連して、一種の霊力をもつと考えられている場合がある。かくしてグルとともになされる祈りはとくに有効と考えられる。彼は、*ayer tawar* とよばれる魔除けの水をつくったり、*azimat* とよばれる呪符をつくったりすることがある。また、その超能力のゆえに、二人の妻を互いに争わせずに統御することもできるといわれ、実際に複数の妻をもつ者が多い。グルの学識は個人によってさまざまであり、その教える内容には大きな差異がある。ある者はマレー語（もしくはインドネシア語）で書かれたイスラムの教えに関する解説に頼って講話を行なうのがやっとなであり、他の者はアラビア語の文法やイスラム法を教えると同時に、アラビア語を通して得られた知識にもとづいて講話を行なう。いわゆる有名なポンドは後者のタイプのグルによって運営されている。

ポンドにおいては一定の月謝は支払われないのが通例であるが、ポンド入りをする際や、断食明けの祭日 (*Hari Raya Puasa*)、収穫後などにグルに対する謝礼がなされることがある。また、グルが週の特定的の日（例えば金曜の夜）⁶⁾ に行なう公開の講話に一般の人々が通って来て、それぞれ少額の謝金をおいていくことがある。高名なグルになると方々から講話に招かれる。ここで一つの有名なポンドの例を挙げよう。Pondok Deniah Bakariah とよばれるこのポンドは、27年前に Hj. Ab. Bakar によって開設された。彼は7年前に他界し、現在では

4) cf. Clifford Geertz, *The Religion of Java*, Illinois: The Free Press of Glencoe, 1960; James Siegel, *The Rope of God*, Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 1969.

5) マレーシアのポンドについては、M. A. Rauf, "Islamic Education," *INTISARI*, Vol. II, No. 1, Singapore: Malaysian Sociological Research Institute, N.D.; 藤本勝次「マラヤにおけるイスラム教育制度」『東南アジア研究』4巻2号, 1966. 南タイのそれについては、マレー漁民のポンドに関して、Thomas M. Fraser, Jr., *Rusembilan: A Malay Fishing Village in Southern Thailand*, Ithaca: Cornell University Press, 1960. タイ人イスラム教徒のポンドに関して、矢野暢「南タイ農村民の村外居住体験について」『東南アジア研究』8巻2号, 1970などに記述がみられる。

6) イスラムでは一日は日没からはじまるのでここでの金曜の夜 (*malam jumaat*) は、西洋式のカレンダーでは木曜日の夜にあたる。

2人の息子と娘婿計3人のグルが、約20人の年長の生徒をつかって初心者（*madrasah*）の訓練を行ないながら、約500人の少年の教育にあたっている。数エーカーの敷地内には約360の小屋が整然と建てられ、ここに約500人の少年と約50人の老人が居住している。小屋はトタン葺き・板張りのものが多く、一戸あたり M\$ 100⁷⁾ 程度の建築費を要する。ここに学ぶ少年達の出身地はクランタン州のみならず、トレンガヌ、ケダー、スランゴール等の諸州に及ぶ。生徒は両親から月 M\$ 20 程度の仕送りをうけている。教場（*madrasah*）で用いる油代として月70セントが各人から徴収されている。

有名なポンドにおける教育内容は比較的高度であり、そこで学んだ者は少なくともイスラム法に通じ、アラビア語が読め、アラビア文字を用いてマレー語の読み書きができるようになることが期待されるが、⁸⁾ 無名のポンドにおける教育内容は概してきわめて貧弱なものである。かくして、ポンドで学んだ経験に対しては必ずしも一定の評価を与えることができない。筆者が調査したクランタン州の一農村 Galok の住民におけるポンド滞在経験と読み書き能力との相関は表1に示す通りであって、著名なポンドを近辺に欠くこの村では、とくに2年以下のポンド居住経験は読み書き能力の獲得にほとんどむすびついていない。

学校教育、とくに近年急速に拡大したマレー語による初等中学教育の普及は、ポンドにおける少年教育をおびやかすことになった。Galok の男子住民の少年時におけるポンド滞在経験は表2のごとくである。若年層におけるポンド滞在経験者の減少がきわめて顕著なことが分か

表1 ポンド滞在経験年数別にみた読み書き能力（Galok の男子住民中、ポンド教育のみを経験した者について）

読み書き能力 滞在期間	読み書き 不可 能	名前だけ 書 ける	Jawi が 読 め る	Rumi が 読 め る	Jawi, Rumi ともに読める	計
1 年 未 満	1					1
1 年	3	2	1			6
2 年	2					2
3 年	5		2		1	8
4 年	1					1
5 年	2		2		1	5
6 年			1			1
7 年			1			1
8 年 以 上		1	1		1	3
計	14	3	8	0	3	28

7) M\$ 3 ≡ US\$ 1（調査時）

8) イスラム教育においては、アラビア文字が用いられるが、これは同時にマレー語の表記にも用いられる。このような表記法は *Jawi* とよばれる。近年では *Jawi* よりもローマ字 (*Rumi*) のほうが一般的に用いられ、マレーシア政府の公文書には *Rumi* が採用されている。しかし、結婚・離婚の証明書などには *Jawi* が用いられ、また *Jawi* で印刷された新聞も発行されている。

表2 年齢階級別にみたポンド滞在経験 (Galok の男子住民について)

年 齢 階 級	人 口 総 数	ポンド滞 在 経 験 者 数	%
20 - 24	22	2	9.1
25 - 29	18	3	16.7
30 - 34	19	5	26.3
35 - 39	17	4	23.5
40 - 44	18	6	33.3
45 - 49	12	6	50.0
50 - 54	15	11	73.3
55 -	23	7	30.4
計	144	44	30.6

る。⁹⁾

有名なポンドではその比較的充実した教育制度のために、生徒の数は必ずしも減少しないが、中には自らの教育組織の近代化をはかることによって新時代に適応しようとするものも現われて来た。¹⁰⁾ 次にその一例を挙げよう。Madrasah Ahmadiyah は1931年に開設されたポンドで、現在のグルの祖父が創設者である。3 エーカーの敷地に約300の小屋が建てられている。居住者の大部分は少年であるが、約50人の老人と約50人の少女もここに生活している。少年と少女の居住区域は明確に区別されている。通常のポンドは少女の居住者を含まないが、ここに少女がいるのは、ポンド区域に隣接するスルタンの土地に、現在のグルが1958年にアラビック・スクールを開設したためである。アラビック・スクールはイスラム教育を行なうと同時に世俗的な教育も行なう近代的な学校の性格を備えていて、主として小学校を終えた者が通学する。ポンドに居住する少女は主としてこのアラビック・スクールで教育をうけている。かくしてこのポンドは、ポンド専従の教師3名、アラビック・スクールの教師13名をかかえて、「旧来のポンド」プラス「アラビック・スクール」という形で運営されている。

弱小ポンドにおいては若者の数は減少するばかりである。町の近くでは若者がポンドに寄宿を続ける場合、ポンドを下宿代わりに使用しながら近くの学校に通うという現象が生じている。学校が遠い場合には、ポンドの住民は老人（とくに老女）ばかりとなりつつある。これらの老女はグルの知識を慕って集まるというよりは、グルのもつ超自然的な能力を媒介として、グル

9) 矢野が調査した南タイのタイ人イスラム教徒の集落では、少なくとも1966年の時点においては、ポンド（ポノ）教育がますます盛んになりつつあり、20代男子のうちポンド滞在経験者は77.3%に及んでいる（cf. 矢野，前掲論文）。仏教徒集落に囲まれ、仏教色に満ちた初等教育をうけるこの地域のイスラム教徒にとって、ポンドの存在は自らの宗教の維持のために不可欠である。マレーシアにおいてはイスラム教育は公立学校の宗教教師の手に移管され得るということが、ポンドの退潮と強く結びついている。

10) この過程はケダー州に関して藤本が記録しているイスラム教育制度の変化とある程度対応しているように思われる。（cf. 藤本，前掲論文）

と一緒に祈ることによって死後天国へいくことができるという側面を重視する。

元来、ポンドはグルの知識を媒介とする教育機能と、グルの超能力を媒介とする救済機能とを兼備しつつも、前者に重点がおかれていたといえる。学校教育の普及は弱小ポンドから若者の教育の機能をうばい、代わりに救済機能を中心として老人に対してより多くのスペースを提供する結果を生み出した。また有名なポンドに対しては従来にもまして教育制度の充実化を要請した。このように今やポンドの機能は二つの極にむかって分極化しようとしているのである。

II 一つの弱小ポンドの記録

人口約10万のバシルマス郡には、現在十数カ所にポンドがある。本稿でとりあげるのはその一つであって、既に述べたような弱小ポンドの変容の過程をたどりつつある。本稿では、このポンドの居住者に焦点をあわせつつ、そこに生じた変化と、生活の実態を明らかにすることを試みる。

(1) ポンドの成立

このポンドはイスラム暦1356年（西暦1937年）に現在のグル（52才）によって開設された。彼はバシルマスその他のポンドにおいて教育を受けているが、メッカに長期間滞在したことはなく、1953年に通常の巡礼を行なっ

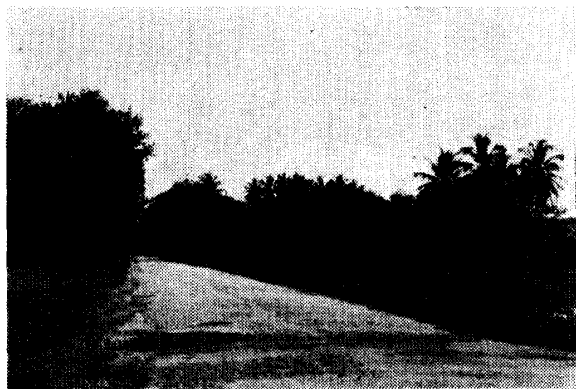


写真1 ポンド全景

ただけである。1エーカー余のポンドの敷地は父親の所有地である。ポンド開設当初は生徒の数が少なかったが、次第に少年の数が増加して数年後には50人を数えるようになった。しかし若者の数は次第に減少して、10年前には約20人となった。他方、老人（特に老女）の相対的な割合が増加し、5年前には老人の数が少年の数を上回るようになったという。現在このポンドにはグルの家族・親族を含めて104人が大小51の家屋（小屋を含む）に生活しているが、そのうち少年のポンド居住者は5人に過ぎなくなっている。

このポンドに居住する者は次の五つのカテゴリーに大別できる。第1はグルの家族および親族、第2はグルに学ぶ若者達、第3は原則として単身で居住する老齢者達、第4はポンドに居住の場所を求めて来た一般家族、第5はポンドに居住の機会を求めて来た単身成年男子である。それぞれの数と来住時期は表3に示す通りであり、またポンド居住者全体の年齢構成は表4および図1のごとくである。近年における老齢者の増加と、既に老齢化したポンドの住民構成が確認される。

(2) 家屋配置および居住条件

ポンド区域にはマドラサ（*madrasah*、教場）と井戸とを中心として、大小57軒の家屋（マド

表3 ポンド滞在年数別にみたカテゴリー別世帯数

年 数	カテゴリー	I グルの家族 および 親 族	II 若 者	III 老 齡 者	IV 一 般 家 族	V 単 身 成 年 男 子	計
1	カ 月			1		1	2
2	カ 月					1	1
3	カ 月			1			1
6	カ 月			1			1
1	年			6			6
2			2	2			4
3				2			2
4				5			5
5			1	3			4
6			2	1			3
7				1			1
8				2			2
9		1					1
10		2		3	1		6
11							
12							
13				2			2
14							
15年以上		4		2	5		11
不 明					1		1
計		7	5	32	7	2	53

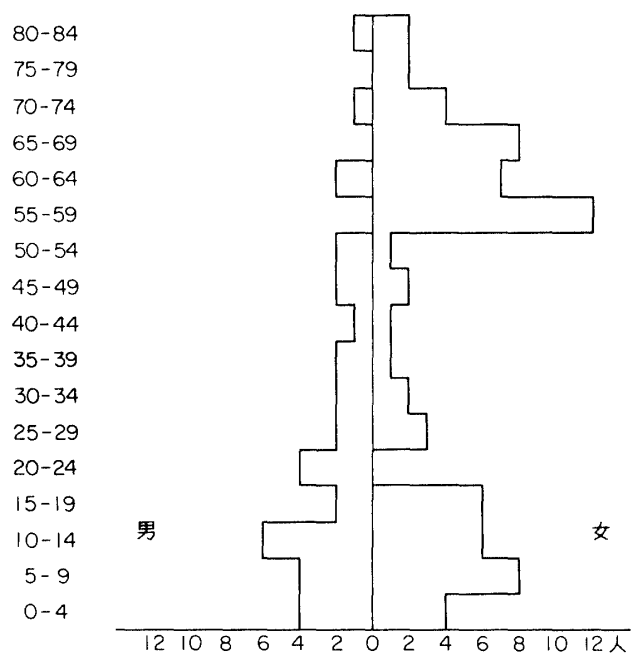


図1 ポンド居住者の年齢構成

坪内：克蘭タンの農村におけるポンド（寄宿宗教塾）

表4 性・年齢階級別にみたポンド居住者

年 齢 階 級	男	女	計
0 - 4	4	4	8
5 - 9	4	8	12
10 - 14	6	6	12
15 - 19	2	6	8
20 - 24	4		4
25 - 29	2	3	5
30 - 34	2	2	4
35 - 39	2	1	3
40 - 44	1	1	2
45 - 49	2	2	4
50 - 54	2	1	3
55 - 59		12	12
60 - 64	2	7	9
65 - 69		8	8
70 - 74	1	4	5
75 - 79		2	2
80 - 84	1	2	3
計	35	69	104



写真2 ポンド区域内の家屋



写真3 ポンド区域内の家屋(小屋)

ラサおよび小屋を含む）が存在する。これらの建物の配置は図2のごとくである。グルの家は道路に面して建てられ、裏側でマドラサにつながっている。小屋のうち5軒は現在無人である。すべての家屋は高床で、大きな家屋は900平方フィート（約81m²）あるいはそれ以上の床面積をもつが、小さな小屋は100～150平方フィート（9～13.5m²）程度である。グルの家やマドラサを含む大きな建物の場合克蘭タン州一帯にみられるようなスレートで屋根が葺かれ、側壁材料として少なくとも部分的に木材が用いられている。その他の大部分の家屋はニッパやしの葉を用いて屋根を葺き、竹を編み合わせた壁を使っている。大きな家屋の構造は通常の農村の家

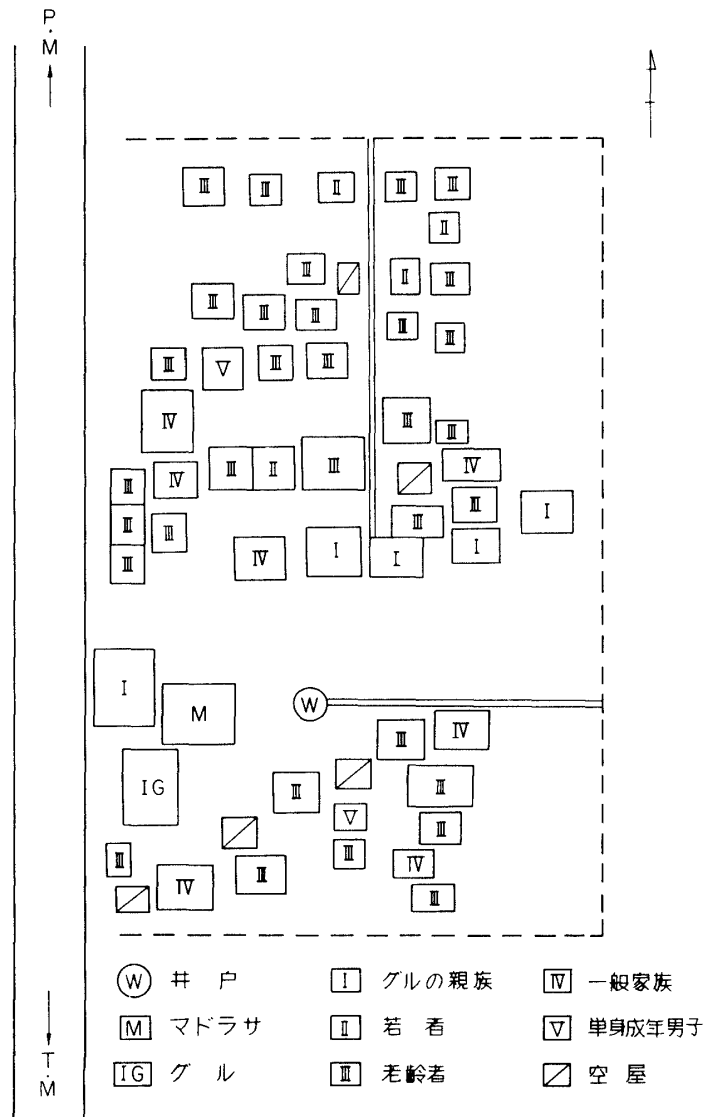


図2 ポンド家屋配置図

屋とはほぼ同様であるが、小屋の構造は著しく簡単である。ポンド内の家屋平面図を二、三示すと、図3のごとくとなる。

大きな家屋の場合、所有権はそれぞれの個人（通常居住者自身）にある。小屋に関しても、自分で建てたり、前住者から直接譲渡されたりした場合には個人の財産となるが、前住者が死亡したり小屋を残して去った場合には、*wakaf* として共同目的に用いられるべく、その処置がグルにゆだねられる。家屋とよぶほうがふさわしいくらいのやや大きい小屋の場合には、その建築にM\$ 150～300 がかけられているが、小さな小屋の場合 M\$ 50～70 程度のものもある。*wakaf* として残された小屋に入居する場合、入居者がグルの請求によって M\$ 10～20 を費やして修理を行なうこともある。

家屋（小屋を含む）には便所は付設されていない。このことは周辺の村落の家屋に関しても

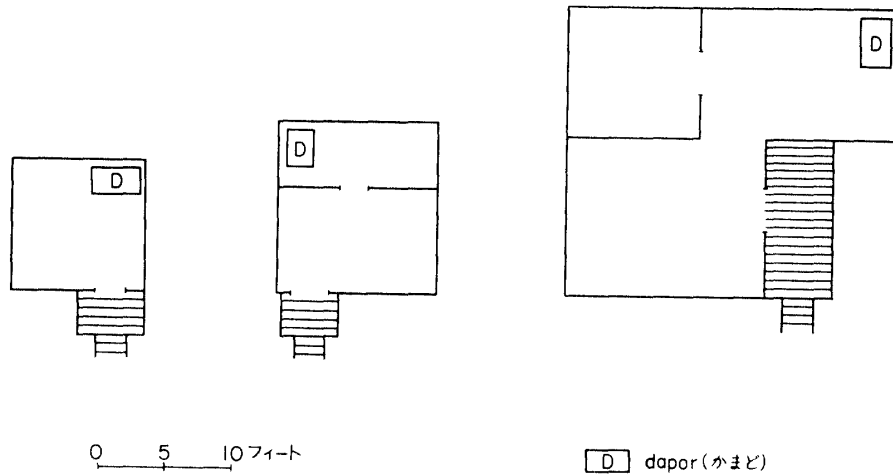


図 3 ポンドにおける若干の家屋の間取り

同様であって、人々は付近のやぶの中で用を足すことになっている。水はすべての者がポンド区域の中央にある井戸を用いる。井戸の側に大きな水槽があり、ここにくみ上げられた水は礼拝前に身を清めるために用いられる。ポンド居住者の1人が、月 M\$ 10 を得て毎日水を井戸から水槽に運び入れる。一般の居住者はこの水を利用するために、月 30¢ をグルに支払う。また、マドラサで用いられる灯油代として年間 M\$ 1 を支払う。これらのほかに支払いを義務づけられた費用はない。

(3) グルおよびその親族

グルの父親は、ポンドから 1/4 マイル弱離れたクランタン川沿いの集落 Jabo の出身で、約 5 エーカーの水田と 1½ エーカーのゴム園を所有していた。母親もまた同じ集落の出身で、約 1/4 エーカーの水田と 1½ エーカーのゴム園を所有している。両親共に生存しているが、父親の土地は自分の使用分である水田 1½ エーカーとゴム園 1½ エーカーを残して子に分配されている。母親の土地は大部分彼女自身が保有し続けている。

ポンド開設にあたって父親からグルに与えられた土地に、現在ではグル自身をはじめ、父母、兄、妹、グルの息子、グルの父方のおば、およびグルの先妻の母が住んでいる。グルの父母と妹（夫に死別）とは同一の家屋に住んで別炊の生活をしており、その他の者はそれぞれ独立した家屋に世帯を構えている。これらの家屋は井戸に近いポンドの中心部に集中している。グ



写真 4 ポンド区域内の井戸

ルのおば（ただし父にとっては異母妹）は、ポンド創設当時に Jabo から居を移して来たのであるが、現在のグルの19才の妻はこのおばの孫にあたる。おばの娘夫婦（グルのいとこ、グルの妻の母）もまたこのポンドで生活した経験をもっているが、彼らはタナメラ (Tanah Merah) にゴム園を所有し、7～8年前からそこを本拠として生活するようになった。ポンド区域に居住するグルの親族を図4のごとくである。近親者が同一の屋敷地に居住することは一般の農民についても認められることであり、特に珍しい現象ではないが、このケースでは同一場所に居住する近親者の数が一般の場合に比してやや多いと言える。

グル自身は5回の結婚経験をもっている。最初の妻とは3～4カ月で離別、2番目の妻との間には3人の子を設けたが死別、3番めの妻は1年半で離婚、4番めの妻は10年余の結婚生活の後死別した。3番めと4番めの妻に関しては一時複婚状態が存在した。現在の妻とは2年前に結婚して1子がある。2番めの妻の母は既に述べたように現在このポンドにおいて生活している。グルの第1子(男)はタナメラ郡の Paloh で水田耕作を行なうと同時にコーラン教師をしている。第2子(男)はこのポンドの道路に面した場所に仕立屋兼雑貨店をひらき、第3子(女)は結婚して隣接する Galok の集落に居住している。グル自身は現在生産活動に従事せず、所有地(水田1½エーカー、ゴム園4¾エーカー、ただし、うち1½エーカーはリプラントされタッピング不可能)を他人に貸出している。これらの土地の大部分は13～30年前に、いとこ、甥、他人などから購入したものである。水稻の収穫が思わしくなかったことと、ゴムの価格が著しく低下したことのために、調査年次におけるこれらの土地からの収入はもみ米 200 *gantang*¹¹⁾ と現金 M\$ 300 余に過ぎなかった。親子3人のグルの世帯にとっては 200 *gantang* のもみ米は1年分として十分な量であるから、現金収入を考慮すればこれだけの収入でも生活は可能である。

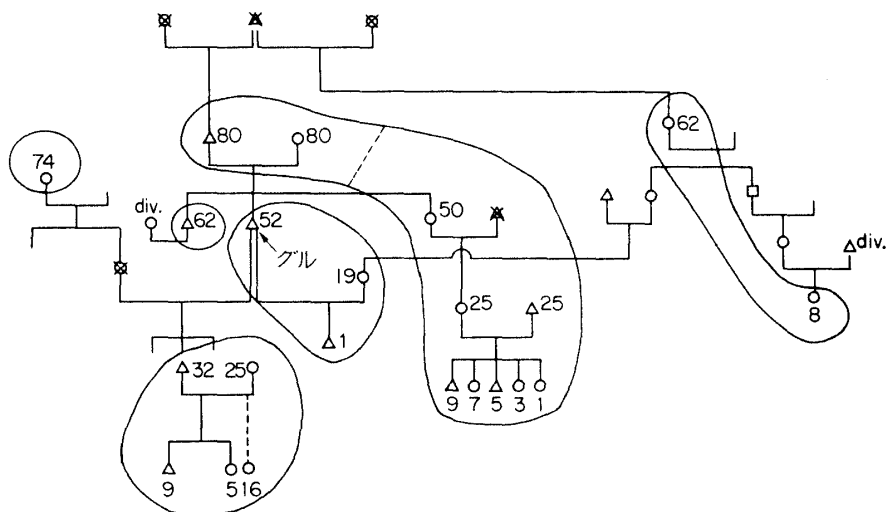


図4 ポンド区域に居住するグルの親族

11) 1 *gantang* = 1 英 gallon ÷ 4.55 l, もみ米 1 *gantang* は約 M\$.50 に相当する。

このほかに収穫期には約 50 *gantang* のもみ米が村人から *zakat* として届けられ、断食明けの日には、ポンドに居住する者の一部および村人達から約 40 *gantang* の白米に相当する金額¹²⁾（一部は現物）が *fitra* としておくられる。また葬儀の祈り、墓地での祈り (*tunggu kubor*)、願かけの祈り (*sembahyang hajat*) 等のために方々から招かれて、1 回について M\$ 1、年間 M\$ 100 程度の現金収入がある。これらの機会には食事をよばれることが多く、また方々の饗宴 (*kenduri*、クランタン方言では *baewah*) に招かれる機会も多い。このように、グルの生活は豊かとは言えないが、決して貧しくはない。

グルの息子は仕立屋としての収入が年間 M\$ 700 を越える。また雑貨店からの収益が年間 M\$ 300~400 ある。これに1958年以来入手したゴム園（計 7 エーカー）、やし園（2½ エーカー）などからの収益が加わって、年間 M\$ 2,000 弱の総収入を得ている。¹³⁾ グルの妹の世帯は、賃耕に依存しつつ水稻耕作（1 エーカー）を行ない、またタバコ耕作をも行なっている。娘の夫に輪タク運転手としての収入があり、さらにゴム園（1½ エーカー）を貸し出しているために、年間 200 *gantang* のもみ米と M\$ 900 余の現金収入がある。グルの兄は、6 カ月前に離婚して単身生活をしている。収入折半 (*pawah*) の約束で父のゴム園でタッピングを行なうほか、自分の所有するゴム園（2 エーカー）と水田（1½ エーカー）を貸し出しているので、年間 150 *gantang* のもみ米と M\$ 300 弱の現金収入がある。グルの父母は老齢のために、水田とゴム園を貸し出した収入のみを得ており、もみ米 150 *gantang*、現金 M\$ 200 弱がその全収入である。グルのおば（同時に妻の祖母）は、既に述べたタナメラに居住する娘夫婦から援助をうけて生活し、グルの先妻の母はポンドで仕立屋をしている孫をはじめ、隣集落などに居住する計 5 人の孫（男 3 人、女 2 人）によって扶養されている。

グル自身およびポンドに居住するグルの親族のうち、メッカ巡礼経験者 (*haji*) が 5 名いる。この比率は一般の村人に比して顕著に高い。メッカ巡礼には 1 人あたり M\$ 1,400~1,700 が必要である。約 20 年前にグルの父親とその娘（グルの妹）が土地を売った代金で、1953 年にはグル自身が自分で貯えた金を用いてメッカへ巡礼した。また約 10 年前にグルのおばと先妻の母とが、現在タナメラにいるグルの長男とともにメッカへ行った。この場合にも、子や孫が土地を買いとることによって資金の調達がなされた。

(4) 若者達

ポンドに居住する若者が現在では 5 名に過ぎなくなったことは既に述べた。彼らの年齢を年長順に示すと、22, 21, 19, 14, 13 才である。22 才および 19 才の若者がそれぞれ 6 年、21 才の若者は 5 年、14 才と 13 才の少年はそれぞれ 2 年の滞在経験をもっている。彼らの出身地はポン

12) 白米 1 *gantang* は M\$ 1.20 として取り扱われる。

13) この金額は、この近辺の住民においてはかなり多いほうである。ちなみに隣接する Galok の集落における平均世帯収入は M\$ 1,076 であって、M\$ 1,500 以上の世帯は 20% (29/145) を占めるに過ぎない。

ドを中心として2マイル以内であるが、すべて道路からやや離れた集落であることは注目に値する。22才の若者と14才の少年とは父母が近隣者同士で、後者は前者を頼ってこのポンドにやって来て、前者の小屋に共住している。

年長者は自らの収入をもつ。22才の若者は他人の土地を借りてタバコ耕作を行なうかたわら、Galok のタバコステーションで作業員として働き、年間 M\$ 600 を越える収入がある。21才と19才の若者も、それぞれ親族や他人の土地を借りてタバコ耕作を行ない、M\$ 500 前後の収入を得ている。22才の若者の場合ほとんど独立した生活をしているが、21才と19才の若者は自分が食べる米に関する限り親から仕送りをうけている。またこの2名はグルとともに葬儀などに参列してそのたびに M\$.50~1.00 の謝礼を受け取るので、この額が月 M\$ 5 程度になる。年少の2名はもっぱらコーランと宗教を学習するためにやって来たもので、それぞれ月 2~4 *gantang* の米と、M\$ 2~4 の現金を両親から受け取っている。

(5) 老齡者達

既に示した表2から明らかなように、ポンド区域に存在する家屋（小屋を含む）の5分の3は老人によって居住されている。大部分が女子であって、男子は夫婦で居住する者1、孫と一緒に住む者1、計2名に過ぎない。これらの老齡者達の出身地は、グルの出身地である Jabo(10名)およびポンドに隣接する Chekok, Galok, Padang Hanggus, Kampong Tengah などの集落（計6名）を中心としている。ほとんどすべての者がポンドを中心に10マイル以内の集落から来ている。このポンドは土地台帳上では Jabo に入っているが、Jabo の主集落は水田を隔ててやや離れており、単なる地理的な観点からすれば Galok および Chekok の集落居住者のほうがよりアプローチが容易である。それにもかかわらず Jabo の出身者がとくに多いことは、グルおよびその両親の出身地が Jabo であって、そこに彼らの対人関係の主要部分が累積していることに関係している。

老齡者の中には、Galok のタバコステーションで働いたり、行商をしたりして収入を得ている者や、自分の所有地を貸してその小作



写真5 ポンドの老女



写真6 ポンドの前でメッカ巡礼に旅立つ老人を見送る。この老人はグルから巡礼の作法を学んだ。

表5 自力による収入金額別にみた老齡者の生活状態

生活状態 自力による収入(年間) M\$	自 活	部分的扶助	全面的扶助	計
0			11	11
～ 49		3		3
50～ 99	1	3		4
100～199	2	4		6
200～299	4			4
300～399	1	1		2
400～499				
500～599	1			1
600～699				
700～799	1			1
	10	11	11	32

料を得ている者もあるが、全く収入をもたず仕送りに依存している者もある。また部分的に仕送りをうける者もいる。自力による収入金額は表5に示す通りである。自らの収入が多ければ援助をうける割合が少なくなることが同表から明確に読みとることができる。老人が援助を必要とする場合、子のうち特定の者が仕送りの義務をおうということではなく、男女に限らず生活に余裕のある者が扶助を行なう。子のうち誰が親を養うべきかという公式的な質問に対しては、村人はしばしば男子と答えるが、これはあくまでもたてまえであって、実際には援助者は男子2に対して女子1くらいの割合で構成されている。ときには孫が仕送りを行なうこともある。子や孫がいないか、あるいは彼らにとって援助が不可能な場合には、他の親族、出身地の村人、ポンドに礼拝に来る者などから扶助をうけることも例外的にある。子からの援助の額は多くても1カ月あたり M\$ 10 程度で、数人の子が不定期的に M\$ 1～2 ずつ現金を与えたり、米を少量ずつ与えたりしている例もある。

老齡者の家族形態を調べると78% (25/32) が全くの単身で居住し、6 ケースは孫（曾孫1を含む）とともに生活している。夫婦で居住するケースが1例だけある。孫（または曾孫）とともに居住するケースのうち4 ケースは、Jabo ないし周辺の集落出身者である。老人と同居する孫の性別は、男3、女5であって、その年齢は6～25才である。息子の子で母親が死亡したもの4名（うち2名は兄弟）、娘の子で両親が離別したもの2名、娘の子で両親がタナメラに居住するもの1名、孫娘の子で父親が死亡したもの1名が含まれている。これらの孫のうち、25才（男）と16才（女）のいとこ同士はいずれも祖母に育てられたのであるが、1年前に結婚しひき続いて祖母と共住している。

隣集落 Galok における単身の老齡者の生活形態を観察すると、孫と共住しているケースが8名（うち女7名）あるのに対して、全くの単身で居住する者は6名（うち女5名）である。これにくらべるとポンドに生活する老人は全く単身で居住する者の割合が多いといえる。孫が

一人暮らしの老人とともに居住することは、老人の孤独感を和らげ、またとくに孫が女で、ある程度生長している場合には、身のまわりの世話をしてくれる者をもつことになる。村落生活においては、老人と共住する子供の生活は、周囲の親族との関係を同時に保ちつつ行なわれる。この最も強力な例は、子の夫婦が隣に居住し、老人自身は、この夫婦の子のうち1人または2人と共住するという形態である。ポンドに居住すると、とくに出身地の村が遠い場合には、これらの孫の生活はある程度親族から切り離されるが、このことは、子供自身が望む状態ではない。このような条件に収入の低さが加わって、通常の村落生活と比較した場合、ポンドでは孫が老人とともに生活する割合はやや少なくなるのである。

ポンドで生活する老人にとっては、グルとの精神的なつながり、および老人同士のつき合いが重要な意味をもっている。肉親を失った老人がポンドにやって来て生活する場合ここに一つの心の支えが存在するのである。しかしながら老人の中には、子が一緒に暮らすことを申し出ていてもなおポンドの生活を好む者もあり、ポンドは必ずしもそこで生活することを余儀なくされている場所ではなく、より積極的な意味をもっていることを強調する必要がある。

老齢者達のうちメッカ巡礼経験者が5名いる。いずれもマレーシア政府によって組織される巡礼団に加わったものである。第1例(73才女)は、13年前にゴム園をM\$ 3,000で売って夫とともに巡礼した。第2例(62才女)は、魚、ござ(*tikar*)、布地などを商って資金を貯め、10年前に単身でメッカへ行った。第3例(75才女)は、母親から相続した水田1エーカー余を8年前にM\$ 1,400でいこの子に売って、単身で巡礼を行なった。第4例(55才女)は、1967年に水田2筆を娘に売って得た資金(M\$ 600)と貯金(M\$ 900)とをつかって単身で巡礼した。第5例(57才女)は、1970年にゴム園1エーカーを息子に売ってM\$ 1,200を得て、これらに加えてM\$ 200を都合し、息子の妻の両親とともにメッカ巡礼を行なった。老齢者のメッカ巡礼が土地を売ることにはむすびついて行なわれることに注意すべきである。土地を買い取った者は、子を含む親族である場合が多く、このことは財産所有の個人主義的な性格を示すとともに、このような状態下における子からの援助のあり方を示すものとして興味深い。

(6) 一般家族

グルとは親族関係をもたないが、ポンドで家族生活をしているものが7世帯ある。これらの者の出身地は、1例を除けばいずれも隣接する集落である。1例のみは2マイル弱離れた集落出身の23才と16才の新婚の夫婦である。妻の祖母と妻自身とがかつてこのポンドに居住していたが、彼らの結婚に際して、祖母は新婚夫婦に小屋をゆずって、自分の村へ帰っていったのである。

これらの家族は、グルの了解を得て、ポンドを生活の場所として選んだものであるが、グルとの宗教的あるいは教育的な関係は希薄である。この種の家族の居住だけが增加すると、ポンドの本来の機能はほとんど消失してしまうことになるが、ポンドの一部分にこのような家族を常態として含むことは珍しい現象ではない。これらの家族はポンドという居住条件の制約をうけて、稲作のための牛を飼うことができないので、若干の水田を所有している場合でも村落居

住者に貸し出している。7世帯中5世帯がタバコ耕作に従事し、これが最も重要な収入源である。薬の行商、ゴム・タッピングなどが他の主な生業である。世帯収入は、年間 M\$ 600～1,200（平均 M\$ 793）で、隣集落 Galok の居住者（平均収入 M\$ 1,076）にくらべるとかなり低い。

(7) 成年男子単身者

46才と34才の成年男子が居住するが、彼らはポンドを一時的な生活の場として選んだ者である。46才の男は少し知能が劣っており、数回の結婚歴があるが、最後の妻とは一年前に離婚した。ゴム園地帯を転々とした後1カ月前にここへやって来てタバコ耕作を始めた。婚礼などの祝宴があるとき水運びに雇われることもある。34才の男は Galok のタバコステーションの作業員として働くために2カ月前にやって来た。以前は11マイル離れた村で生活していたが、2年前に妻を失っている。子供（8才と5才、ともに男）は妻の母と生活しており、彼は月1回自分の村に帰って1回 M\$ 5 を与える。

お わ り に

本稿では一つの弱小ポンドに焦点をあてて、その変遷と現状を記述した。農村の若者達は学校教育の普及とともに、ますますポンド教育から遠ざかっていく。本来ならばこのことはポンドの衰退を意味するはずである。しかし、このポンドでは老人達が若者達に代わって居住することにより、新しい可能性が求められた。

現在活動中のグルにとっては、老人を中心とするポンドを維持していくことが残された唯一の道である。しかしこの現象は、村落地域の弱小ポンドの将来が、老人を主体とする形をとって存続していくことを保証するものではない。グルの権威が一代限りであることはやがてグル自身の死亡とともに既存のポンド自体が解体する可能性を含んでいる。

最近教育制度が強化された有名なポンドの出身者にとって、村落部に新しいポンドをつくることは、もはや困難となっている。彼らが知識を強調する教育を受けたとしても、その知識を村落の若者達にポンドを通じて伝播する機会もはや失われつつあるからである。若者の宗教教育は、克蘭タンにおいても、もはやポンドのグルの手から学校の宗教教師の手に移りつつある。

この地域の農村においては、親の家族と子の家族とは、後者の一部が世帯を別にしながら同一屋敷地内に居住するのが通例であり、親子間で激しい対立が生ずることも、また老親が孤立することもある程度さけられる仕組みができていく。このことを考慮に入れると、ポンドにおける老人の増加は、必ずしも村落居住者側からの要請が増加したためではない。それにもかかわらず、弱小ポンドを老人ホームとしての機能から眺めると、その役割には注目すべきものがある。老人の福祉の増大のためには、ポンド的なタイプの老人ホームが政府あるいはその他の基金の補助を得て、よりすぐれた環境下に整備され、発展することはきわめて望ましいことである。とは言えこのような機運はまだ熟して来たとはいえない。老人居住者を主体とするポンドは、しよせんは衰亡に先行する過渡的な姿に過ぎないのかもしれない。